

月刊 KEIZAI

September

昭和60年12月10日 第3種郵便物許可
平成21年(2009)8月25日 発行(毎月25日 発行)
第25巻 第9号(通巻287号)
E-Mail:syunjyu@ms1.megaegg.ne.jp

春秋

2009
9

¥300

道の日特集

「国道で取り組む身近な事業」

「『道の日』によせて」

「バスを活用した生活交通の確保について」

「他の為に尽くし切る生き方」

平出純一 (国土交通省広島国道事務所 長)

井上徳宣 (広島県土木局 土木整備部長)

木時 誠 (広島市道路交通局 長)

伊東由美子 (文華堂 社長)

母を語る

視点

論点

「日帰り観光から滞在できる観光への転換に向けて」

元野一生 (国土交通省中国運輸局 企画観光部長)

広島政財界人物誌 (その105) — 楠原政之助 (その2) — 田辺良平 (広島県経営史研究所)

シリーズ 広島上場企業役員録「広島電鉄」

○ 広島県庁人脈
○ 広島市役所人脈

土木局 都市局
都市整備局 道路交通局

絵 松富

繁 (西日本高速道路マシナリ中国常務)



広島政財界人物誌

(その105)

広島佃煮製造の先駆者

広島県経営史研究所 田辺良平

楠原 政之助(その2)

広島市内のある食品製造の大手業者の宣伝パンフレットに目をとおして

ないかと思われるが、確証は得られていない。

と「明治二十二年、広島で佃煮が創業される」とあった。その業者に電話して、その出所を尋ねたところ「以前佃煮業者の集まりで古老たちが座談会を行った際に出た発言です」という返答であった。それなりの根拠をいろいろ調べてみたが結局分からないまま

はつきりしていることは、前号でも紹介したように、明治三十一年、楠原政之助が、大阪や長崎などに出掛けて行って佃煮などの塩漬製法を学んで広島に帰って製造に踏み切り、市場に出回らせたのが、広島における佃煮の始まりとするのが妥当と言えよう。ただし、楠原塩漬工業の創業年は明治三十年とされているが、おそらく政之助が十年ぶりに広島に帰り、榎町土手筋の親元に住居を移したことから、この年を創業年とされたのではないかと思われる。

ところで、前号でも述べたように、明治、大正から昭和の戦前、戦後にかけて、広島県の佃煮業界はその質といい製造量といい全国的にみても一、二

◇

の記録がみられる。主に牛肉の塩漬を作ったようで佃煮の製造にはふれられていない(大正十四年発行『広島県人物評伝』が、あるいはそれが広島における佃煮の発祥と語られたのでは

を争うほどの特産品に育っていた。その中でも楠原政之助商店は一頭抜きんでた存在を示していたが、これもひとえに政之助の製造技術の改良や販路の拡大など企業努力によることは勿論であった。

しかし彼は、その製造方法などを独り占めすることなく、従業員が独立する際にはいわゆる「暖簾分け」のようになかたちで、その製法などを伝授してきたのであった。この結果、広島には小規模な佃煮業者が数多く生まれたが、これらの業者がお互いに切磋琢磨して良い品を安く提供することに工夫がこらされてきたことから、広島の佃煮が名声を馳せるようになったのである。

太平洋戦争中は、原料の割り当てなどで業者の整理統合もみられたが、佃煮は軍隊という大口の需要に支えられて、何とか生き延びてくることが出来

たのであった。戦後は、軍隊という大口需要先はなくなったが、その分一般市場へ広く普及して行き、食料難の中にあつて気軽に手に入る、安価で豊富な栄養素を含んだ副食品として重宝され、いち早く量産体制を整えることができて、戦前以上に広島佃煮の声価を高めてきたのであった。

◇

楠原政之助商店が個人商店から合名会社となった昭和七年以降、業績はとみに向上して四工場、三店舗を有し、販路もハワイ、北米へと伸ばしたのであった。昭和十六年に、ある業界紙が広島支所三十周年を迎え「躍進業界を展望」のシリーズで「堅実無比の内容を有つ 楠原政之助商店」の見出しで次のような記事を掲載している。

(前略) 当社現在の営業は、味噌、漬物、佃煮並びに塩漬製造及びその他一般食料品の販売で、平素長男森太郎氏が上天満町塩漬工場、次男伊三郎氏が中広町味噌佃煮工場を、又四男政美氏が榎町営業部と各分担し政之助氏は本社横堀町にあつて漬物工場を担当し、且つ全般の指揮監督に当たるといふ組織立った経営方法によつて遺憾なきを期している。

而して販路も頗る広範囲に亘り、



おみやげコンクールで入賞の楠原堀佐詰会社の製品

内地は東京、京阪神を中心に関西、九州一円に及び、又満州国、朝鮮方面からも常に多数の引き合いに接しこの外直接又は貿易商の手を経てハワイ、米本土にも年々少なからぬ輸出をなし、声価を挙げているばかりでなく、軍隊への指名納入は久しぶりもので、近來いよいよ多忙を極めていた。

折から、たまたま今次事變の勃発となり、軍部の注文は夥しい激増を加え、更に一般の需給もまた同様の経路にあるため、当社の有す全機能

を挙げて生産に馬力をかけて注文に応じているが、なお不足がちのため地方の農産加工組合及びその他に製造を託すという豪勢ぶり、最近の躍進には全く驚くべきものがあつて年商も百数十万円と註され、堂々たる一流商店の貴族と存在を明らかにしている。(後略)

政之助商店の営業の状況がづぶさに記されていて、相当な景況をもたらせていたことが伺えるのである。当時の百数十万円といえほどのくらいのもなのか？一つの例としてみると、現在では地場で中堅どころの建設業者として活躍しているS組が昭和十九年に設立されているが、設立初年度の売り上げが百三万一千円、当期利益金五万四千四百円と記録されている。業種が違うので一律には比較できないが、食品業での年商が百数十万円がいかに大きなものであるか、一つの目安にはなるであろう。ちなみに当時の市内電車の均一料金が五銭であつた。現在は百五十円と三千倍となつている。

彼は、昭和二十年十二月の日記に次のように書いています。

政之助一代で御国に対しご奉公三通り有ります。

一、貴族院多額納税者内より選挙資格名簿に入る

二、広島市商工課より、市実業功勞者として表彰を受け銀杯を戴く

三、敗戦の結果、国内十万元以上の財産家より財産税を取る、これも十一万三千円納め奉公す

事業の繁栄に精根を傾けた様子が十分に伺えるが、併せて国家への奉仕の心構えを忘れないところに明治人の氣骨が読み取れよう。

◇

このように絶頂期にあつた楠原政之助商店ではあつたが、昭和二十年八月六日の原爆の投下によつて、これらの工場、店舗はすべて倒壊、焼失し、政之助の製造設備は壊滅したのである。以降彼の「憶」と題する日記には、原爆が投下された六日から八月十四日までの状況が詳しく書かれている。この記述だけで一編の記事に出来るほど貴重な「原爆の記録」だが、原爆の記述が本書の目的ではないので今回は割愛させていただく。いずれ機会があればこの記述を紹介してみたいと思う。

参考までにこの記録は、原爆資料館に

寄託されたとのことだ。

◇

政之助は原爆投下当日、井口に疎開して難をのがれることが出来たが、工場は爆心地から卑近の距離にあつたことで四工場共全壊したのである。しかし彼にとつては、工場の壊滅以上に次男の伊三郎が亡くなったことが、大きな痛手であつた。味噌部門の責任者として政之助商店の大きなウエイトを占めるようになっていた味噌は、伊三郎の一方ならぬ尽力によるものであつた。伊三郎は、広島市商業学校を卒業するとただちに東京や京都方面の味噌工場に行つて修行を積み、味噌づくりのノウハウを習得して帰郷し、父の指導のもとで味噌工場の責任者となつていたのである。六日の朝は、中広の味噌工場にいて倒壊した工場の下敷きとなつたが、どうにか脱出はしたのだが火傷がひどく、これが原因で数日後に亡くなったのである。

一方、長男の森太郎は上天満町の堀佐詰工場にいたが、大した怪我もなく健在であつたことが、政之助にとつては大きな救いであつた。三十六歳の森太郎は働き盛りであり、父に代わつて早速に、工場の復旧作業に取りかつたのであつた。彼は、広島市商業学校を卒業するとすぐに政之助商店に入社

して、父を助けて主に壕缶詰部門を担当して業績を伸ばしてきていたのであった。業界紙などには「夙くから斯業に携わり、一面熱心な実父政之助氏の指導もあって既に深い経験を重ね遣り口も頗る堅実で、当社大屋台骨を背負って立つに相応しい人である」と書かれてもいる。

森太郎は、工場の復旧に際して、今後の業界を展望して、漬物に主力を置いた工場づくりを考えていたようだ。昭和三年当時、政之助商店の売り上げの内訳をみると次のように記録されている。

漬物	二〇、五五五円五〇銭
味噌	二七、三五七円七〇銭
壕缶詰	九、〇二〇円七〇銭
新市店	一、二六四円〇八銭
發送品	一五、九九〇円三四銭
帳メ後	一、四七〇円二九銭
店品	二四、一二四円〇一銭
借金	五〇〇円以内

差し引き不景気のため一万円の利益と記されている。味噌は既に独立させていて、昭和六年には皇室からの御買上という光栄に浴しており、これを記念してブランド名を「国宝みそ」と名付けたほどで、安定した売り上げをみ

せていたのであった。

一方、佃煮については、品数が豊富なことや壕や缶の処理にも手間がかかることから、経営効率からみると必ずしもよいものではなかったが、何といても政之助商店にとっては、広島での佃煮創業者としての誇りもあり、効率を多少は犠牲にしても継続していかねければならなかった。結局、原料の野菜類が豊富で比較的身近な所から入手出来るということ、日本人の口に最も合った食品として今後とも需要増が見込めるということから、漬物に主力を置いての工場再建となったようである。

原爆以降、会社の経営一切は森太郎に任せて、政之助は専ら家庭内の復旧に尽力していたが、会社や家庭内の確固たる復興の様子をみないままに、昭和二十二年十二月九日、西観音町の自宅で亡くなった。享年七十だった。墓は菩提寺である中区寺町の光圓寺境内にある。原爆という惨禍には逢ったが十歳の時から奉公に出て以降、これらに先で培った商売のノウハウを最大限に發揮し、広島において壕缶詰の佃煮を定着させたほか、漬物や味噌醸造に進出して、多額納税議員選出資格を得るなどの地位を築いたことなどで、その生涯は悔いのないものであったので

はないかと思われる。

◇

政之助の跡をついで商店の経営をすすめることになった森太郎は、翌二十三年五月には、従来の合名会社楠原政之助商店の壕缶詰部門を分離独立させて、資本金百五十万円で楠原壕缶詰工業株式会社を設立し社長に森太郎が就任、四弟の政美と森太郎の妻ハツヨの父山本政次郎、原爆で亡くなった二弟伊三郎の妻ヨシエを取締役として再発足したのである。

森太郎は、父以上に経営の才覚を發揮して、戦前から広島の特産品として声価を高めていた壕缶詰製品を、単に国内だけに止めず、将来の貿易自由化がすすめられた際、外国との取引にも通用するような商品に育成する必要があると見越しての新会社の設立であったようだ。さらに昭和二十七年には、中央市場法に基づいて商事部門を独立させ、株式会社楠原商店を設立して、缶詰、漬物、味噌の元卸機関とし中国・四国地方を販路とする大卸営業をさせることとしているのである。

昭和三十三年八月六日、昭和天皇の弟君である高松宮殿下が広島に來られその際、復興の著についていた広島市内の優良な工場を見学されたが、その一つとして楠原壕缶詰の工場も見学さ

れるという光栄に浴したのである。政之助が生きていたらどれほどの感激を受けたことであろうかと、森太郎にとっては一人の思いであったようだ。

森太郎は、その温厚で篤実な人柄から、業界団体から推されて、広島県カン詰協同組合の副会長にも就任するなど、業界のまとめ役としてもその才能を發揮してきたのである。就任した間もなく、主に北海道から出荷されたカン詰に、中身は馬肉なのに牛カンとして売っていたことが東京方面で問題となり、その矢面に立たされることになった。その時彼は「今度の問題は、広島のカン詰め業界にとつては、プラストと言っているようだ。と言うのは、戦前全国の牛カン需要の七、八割は広島産で賄っていた。それが、安い馬肉を使った北海道産の牛カンに押されて今ではやっと一割程度。悪い品物のために牛カン全体が消費者から飽きられた感じだ。だからこの機会に、品質表示を厳しく取り締まってもらえば、今後、広島のカンも老舗の威力を取り戻すことが出来る。現在広島県内には十五社のカン詰め工場があるが、東京で問題となったようなモグリ会社は一つもない。だから、広島産のカン詰めならまず間違いない」と語っている。

楠原壕缶詰会社としては「カン詰め



昭和年代の政之助一家の正月（前列左から3人目政之助、後列左から2人目森太郎、楠原千津恵氏提供）

会社は中小企業が多く、当社もその一つだが、今後大資本の水産会社がカン詰め業界に進出することは大いに考えられることで、これとの対決が大きな課題となるだろう。しかし安易に大手の下請けに甘んじることなく、中小企業で培ってきた伝統を生かして、独立独歩で堂々と渡り合いたい」との思いを森太郎は抱いていたようだ。

昭和四十年には、高田郡吉田町（現安芸高田市）に新工場を建設して、市内の工場を集約して効率化をはかっている。さらに翌四十一年には、政之助の次男伊三郎が育てた味噌部門を独立させて、

別会社として経営することとした。

森太郎は、缶詰会社を経営するかたわら、昭和二十五年十二月から四十三年六月に亡くなるまでの十八年間にわたって、財団法人開教部（せんきやうぶ）の理事に就任してその発展にも寄与してきている。開教部は、親鸞聖人が開顕された浄土真宗の教えを広めたいとの願いを持った篤信者が集まって明治の初頭に誕生させたものであり、明治三十三年には、地元の有力財界人の出資によって財団法人となり、布教、興学、慈善事業の三本を柱として活動を行ってきたものであった。現在広島地方には「安芸門徒」といわれる浄土真宗信者が多いのも、開教部などの活動に負うところが多かったともいえるのである。

開教部の興学事業としては、戦前まで存在した「光道学校」の経営が広く知られている。現在中区土橋の電車停留所のそばに建っているマンシヨンの所に学校があったが、明治九年に「読み、書き、ソロバン」を教える寺子屋からスタートしたもので、その後、幾多の苦難に遭遇して存続廃止の岐路に立ったこともあったが、その時々財界などからの支援を受けて、原爆で校舎が焼失するまで続いてきたのであった。私学としては珍しく男女共学で、

大正十二年に建築された鉄筋三階建ての校舎は、当時としては珍しいもので西日本の各地から見学に訪れる学校関係者が多かったといわれている。

慈善事業としては、地震や風水害の被災地への援助、天災による穀物の不作地への救助など手広く行ってきたのである。また布教活動では、定期的に高名な僧侶や学者を招いての講話会を催してきている。森太郎はこの開教部の理事として、物心両面にわたって援助してきたのである。政之助が納税者として国家に奉仕出来るようになったことを喜んでいたが、森太郎は開教部などへの協力で、父の跡をついできたのであった。

昭和四十三年六月五日、森太郎が亡くなった。五十八歳という若さであった。楠原壘缶詰にとっては掛け替えのない痛手であり、その後の同社は、外部要因などもあって規模の縮小を余儀なくされるという事態に陥るのではあるが、政之助と森太郎の残してくれた遺産は守り通してこんにちに至っているのである。

（この項おわり）

【お詫び】

前号16ページ2段目左から16行目「中山ヒナ」とあるのは「山中ヒナ」の間違いです。お詫びして訂正します。